

副島ハマ著

『ヨーロッパの保育の原点と現状』

松川由紀子

本書は、次のような目的でヨーロッパ旅行した著者が、帰国後、まとめたものである。すなわち、「第一の目的は、保育の遺跡を訪ねることと、先駆者の思想が現在の幼稚園にどのように活かされているかを見ること、第二は保育制度の体系を勉強すること」（三五ページ）。いわばヨーロッパ保育訪問記といえよう。

訪ねた国は、東西ドイツを中心に、イギリス、フランス、スイス、デンマーク、イタリア、スウェーデンの八カ

国。幼稚園の創立者フレibelをはじめ、ペスタロッチ、モンテッソーリ、アンデルセンなどの遺跡を見学し、各国の幼稚園および保育施設を視察している。

はじめに、見学の様子が百五十枚を越えるカラー写真で紹介されている。読者は肌で感じることはできなくても、楽しく見入ることだろう。また、それらの写真の説明が本文でなされている。

本文は四部分からなっている。最初

は、「保育の原点」。ここでは、フレibel、ペスタロッチ、モンテッソーリなどの生涯および教育思想について述べた後、遺跡を見学した時の感想を記している。次に、「訪問した幼稚園」。

幼稚園および保育施設の実態についてメモ風に述べている。そして、三番目は、「ヨーロッパの保育制度」。ドイツ、フランス、イギリスの保育制度の歴史的考察および現行に関して素描した後、幼稚園、保育所の現状をまとめている。最後は、「まとめと反省」。保育に情熱をもやす著者の人柄がにじみでているような文章で綴られている。

以上が本書の概観である。

さて、本書のテーマである、ヨーロッパの保育の原点と現状について要約してみよう。

著者は、人道的な立場を保育の原点

たと述べている。たとえば、フリーベルが幼稚園を設立したのも「自分が幼児時代不幸であったから、国中の幼児の福祉を願う立場から」（二〇四ページ）であったととらえている。このように、「幼児を人間として見ることに幼児の人格尊重」を保育の原点だと強調している。

また、ヨーロッパの保育施設は国によって名称はまちまちだが、「殆んど全部働く母親の子どもたちが対象であった。言い換えると、どの施設も、保護と教育を兼ねた日本の保育所のような施設であった」（一八九ページ）と、現状を述べている。したがって、たとえば西ドイツの場合でも、対象児が働く母親の子どもが多いことから、対象家庭の要求にあわせて保育時間を決めるため、多くの幼稚園では、長時間保育をしているという（一六九ページ）。

本書を横文字の苦手な方におすすめしたい。日本のみでなく、広い視野に立って保育したいものだと思う。本書は、フリーベルの『人間の教育』をはじめとする、いわゆる保育の古典に親しむための良き手がかりになるだろう。私は、この本を手にした時、まるで吸いこまれたように一気に読んだ。

そして、とてもすがすがしい気持ちになった。それは、著者をはじめ、各国の保育者の真剣な姿勢、人柄が伝わってくるからだろうか。特に、「肌で感じた」とフリーベルのお墓を参った時の記述は、感動的であった。それは、保育者のみが味わう感激なのだろう（倉橋惣三著『フリーベル』を参照されたい）。

ただ、歴史研究として問題に思った点を最後にふれておきたい。

本書は、保育の原点を歴史的に考察

し、保育制度を考えるという意図のもとに書かれていた。また、フリーベルなどの教育思想の考察がその大部分を占めていた。そして、保育制度に関しても、素描とはいえ、歴史的に考察されていた。けれども、たとえばフリーベルの幼稚園と当時の保育制度との関連が手薄なように思われる。当時の新聞は、幼稚園創立の動機を、そのころ多く存在していた単なる保護の託児所、早期教育の幼児学校などの欠陥を是正するため、と報道している（ランゲ編、フリーベル全集第三巻、四七三ページ）。また、フリーベル自身、幼稚園が「本来の姿、すなわち、真の託児所」になることを望んでいた（同名、四八一ページ）。このように、保育史の中で、フリーベルを考察したいように思う。（白眉学芸社刊、A五版、二一七ページ、定価一六〇〇円）